

陸前平野区域の古墳

著者	松本 彦七郎
雑誌名	東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究邦文報告
巻	9
ページ	115-130
発行年	1930-06-28
URL	http://hdl.handle.net/10097/31943

陸前平野區域の古墳

理學博士 松本彦七郎

陸前平野乃至これに臨んだ地域には可成り多數の古墳がある。極めて偶然の機會以外には古墳の内部構造や包藏遺物までを研究する事が不可能であり、さればとてそれ等までの研究が出来ぬ故に手を染めずに傍觀すると云ふ事も必ずしも學究としての忠實な態度であるまい。茲には甚だ卑近ながら出来るだけの範圍内に於てこの平野區域の全部ならねど若干多數の古墳を列記して見やうと思ふ。

古墳の分布は恐らく往時の多賀ノ國に於ける文化の中心が如何であつたか、主班君公の城下が大略何處の邊に存したか乃至如何移つたか、及それより以下の豪族などが何處の邊に住居したか等に對して或る暗示を提供して居る事であらう。又或る特別な場合には當時の海岸線が大略何處の邊を走つて居たらかを察するの一助ともなる事があらう。

(一) 下増田村杉ヶ袋及塚根の古墳群。この邊より東多賀村塚原にかけて大小の古墳が存する事は先に拙著に於て述べた所である。茲にはその内でも著しいものを舉げる事とする。

杉ヶ袋經塚古墳。恐らく陸前の古墳中最もよく學界に照會され中央に知られた古墳である。今は南側大半部が削り夷げられ全墳域が隔離病舎となつて居る。杉ヶ袋及塚根等の主なる部落の存する大砂丘の直ぐ外側の砂丘上にあり、封土も砂丘の砂より成つて居る。この砂丘は現在海岸線より約二千米の

距離にある。圓墳にして、一滄を周らし、滄の内縁環をそれとした墳丘直徑五十米、但し墳丘は低い裾を曳いて居るから全く丘狀をなした部分の直徑は約四十米、墳高七米、滄の幅は十八米前後にして、或る箇所ではより狭く、或る箇所ではより廣い。墳丘の丘狀部の麓に埴輪圓筒列が周らしてあつたのである。墳丘の北端より南二十米、墳頂より約二米の深さに石棺が存したのであり、石棺の周圍には若干數の巨礫が置いてあつたと認められ、この巨礫は石槨に擬したものである。石棺は組立式にして、恐らく長持形に近く、ともすればその原始型とも見られさうな一種の型である。底は不規則長橢圓形の板狀をなした厚い一枚石であり、四壁に圍まれた函狀部より前後には餘計に左右には尠く食み出して居る。左右及後の壁は各一枚の薄い石より成り、前の壁は二枚の薄い石を全く重ね併せたものより成つて居る。蓋はこれ亦食み出した厚い一枚石より成り、前と後とには極めて粗雜な削り方にて各二本の棒狀突起が附してある。底の上面及蓋の下面には四壁の板石に適合するやう削り込んであり、特に蓋の下面なる函狀部の天井は甚だ淺い穹窿狀をなすやう刳られてある。四壁は垂直である。石材の質は古生界の恐らく硬砂岩であつたと記憶する。水利の便を以て阿武隈山地より齎したものであらう。この石棺が長軸を東西にして東枕に歛めてあつたのである。石棺内には玉髓の細礫が敷きつめられ、尙ほ丹も用ゐてあつたのである。この細礫も阿武隈川の流下する砂礫中より採取したものであらう。石棺の構造より見るもこの古墳は如何にも舊さうであり、既に學界に報告されてあるこの古墳の出土物乃至遺物も舊しと見るに都合よささうである。

尙ほ眞の陪塚であるか否かを問題外として、概略の呼び方にてこれの副墳とも見做し得べきものが同じ砂丘の内側縁に沿うて數個存し、現に完形をなして居るものが三個程ある。三個とも圓墳にして、直徑十五米内外あり、内二個は高さ一米半許、一個は同じく一米許ある。凡てこの砂丘の松林中にある。

杉ヶ袋北通藥師塚古墳。 部落内にあり、現に嚴めしくも舊い藥師堂が神社の形に祠られてある。圓墳にして、直徑大約四十五米、高さ約七米、堂のある頂上平坦部の直徑約十五米程ある。頂上を除いた墳丘上には少數十株の老松が生ひ茂つて居る。周塹は見えぬ。この古墳も次のものも主なる部落のある大砂丘上にあり、この砂丘は現在海岸線より二千三四百米の距離にある。

塚根雷神塚古墳。 塚根には屬すれど、杉ヶ袋北通に接近してある。兎形をなした圓墳にして、元來一塹を周らしてあつたと認められ、塹は現に田になつて居る。直徑約三十米、高さ約五米、塹の幅十米内外はあらう。封土は砂丘の砂である。頂上には忠魂碑あり、墳丘の周斜面には松が生ひ立つて居る。

(二) **岩沼町北部及附近の古墳群。** 著者が實際に知つて居るもの二個あり、共に殆ど完形を保つて居る。

館腰村堀内北向古墳。 部落内にてその公會堂の直ぐ前面にある。圓墳にして、現在に見る頂の面は方形をなし、全形が宛も兎狀をなして居り、本來一塹を周らして居たものと認められる。墳丘の外縁部は低く裾引いて幅三米許あり、中央の丘狀をなした部分の直徑は大略三十米程、墳高は五米前後と認められる。頂の方形部の邊は各四米許にして、その中央に三角點あり、標高八米四である。墳上に三石祠と警火櫓とがある。塹は現在西

半部だけが存し、一部分は田、一部分は水溝となつて居り、幅は三米内外ある。堀内及本郷などの主なる部落の存する舊い大砂丘上にあり、墳の封土は砂丘の砂である。

岩沼町東長町東平王塚古墳。 直前古墳より約千米の西方にて、鐵道線路より直ぐ西側の田圃内にある。前方後圓墳にて、南微西に向ひ、前方部の前縁までが圓らかに彎曲し、全體が瓢形で、中途部がよく括れて居る。全長約三十米、前方部横徑約八米、後圓部直徑約十二米、現在田面上の前方部の高さ約一米半、同じく後圓部に於ける墳高約二米半ある。後圓部の頂に山神塔と刻せる碑と三株の松とがあり、墳の面は芝生になつて居る。

(三) **千貫村長岡丘上の古墳群。** 千貫村大久保より長岡に到る東西に細長い丘の上には若干少數個の古墳が存したものの、やうであるが現には形のよいもの二個を認め得る。

長岡丘上東古墳。 同所の山神祠に近い所にて、特に丘の最高點を占めて存する。現に畑に圍まれて幾分角張つた輪廓を示せど、本來圓墳であつた事であらう。直徑約九米、頂上平坦部の直徑約五米、墳高三米弱あり、標高は二十四米六で、平野の展望が豊である。墳の面は芝生をなし、裾の部分には低い雜木もある。

長岡丘上西古墳。 圓墳にして二段あり、上の段は頂部に近く、小さい環狀の括れを作り、以て墳頂部が小さく狭く且つ凸出したやうになつて居る。直徑二十米餘、高さ五米許ある。海拔は直前古墳に亞ぐ程の高さである。南中腹に數基の石碑と一寸した祠とがある。北中腹には一株の栗樹が聳え、その他墳上一面に小杉を植ゑてある。

(四) **館腰村飯野坂及植松丘上の古墳群。** 特に雄大な三個の古墳を主班とし、これに尙ほ大小の數古墳を併せ存して、實に陸

前平野區域に於ける第一位の古墳群である。恐らくは古墳の最高潮期のものを主として居る事であらう。

植松丘上主古墳。 著者の知れる限りに於てこの平野區域の最大の古墳であり、丘上最高部に於て形勝の位置を占めて居る。南面せる前方後圓墳にして、全長約百二十米、中途部が括れて、前方部横徑及後圓部直徑がそれぞれ約六十米、前方部の高さ約五米、後圓部に於ける墳高約十米あり、後圓部の墳頂は直徑約二十米が程が平坦になつて居る。後圓部は兜狀をなし一段があつて、段下の周縁帶が如何にも悠然と廣い。この後圓部に巨礫と云ふ程では無いが適度に大きい礫よりの葺石がある。埴輪圓筒の破片が裾の部分に散在して居る。前方部の前面部は墓地となつて居て、松、杉、及多數株の櫻があつて、花期には特に美を添へる。前方部後半及後圓部周縁帶の或る部分は畑となつて居る。後圓部の周斜面には少數株の杉と多數株の松とがある。後圓部の東中腹に石祠がある。墳頂平坦部の一隅に三角點があり、標高四十五米九である。

植松丘上副古墳。 直前古墳の直ぐ北側にあり、圓墳にして直徑約三十米、高さ約八米あり、海拔は主古墳に僅に劣る所があらう。裾の部分に墓地もあり、雜木が茂つて居り、登つて觀察するに不便である。

飯野坂藥師堂古墳。 飯野坂丘上の東縁部に於て直ぐ接した東側に藥師堂を控へて居る。前方後圓墳にして、南微東に向ひ、全長約六十米、前方部横徑約二十米、後圓部直徑約三十米、前方部の高さ約四米、後圓部に於ける墳高約八米ある。海拔は四十米未滿位であらう。前方部上は平坦で、櫻の苗が植ゑてあり、平野を望んで眺めが佳い。後圓部には小松が茂り、頂上に石祠がある。

飯野坂薬師堂北副古墳。 直前古墳より少しく離れて北にある。方墳と覺しく、一邊が十八乃至二十米位あらう。高さは四米許ある。海拔は四十米未滿位あるらしい。埴輪圓筒の遊離したものも見える。

飯野坂薬師堂西北副古墳。 直前副古墳の西にて此處なる丘の東半部の略々中央に位置して居る。現存形は南北約七米、東西四乃至五米程の長方形になつて居るが、本來前方後圓墳であつたと認められ、現に中途部の括れが存して居る。畑の面よりの高さが二米許ある。

飯野坂薬師堂南副古墳。 これの主古墳より少しく離れた南にて、雑木林の中にある。前方後圓墳にして、略々南に向ひ、長さ約十米、後圓部直徑約六米、墳高約一米半程ある。海拔はこれの主古墳より少しく低い。

飯野坂觀音堂古墳。 此處なる丘の東北隅なる一丘塊を占めて居る。南微東に向つた前方後圓墳なれども、中途部がよく括れ且つ低く窪み、前方部が後圓部と高さを競うて居るので、宛も二ツ塚のやうな形に見えるのである。墳の封土を採り、且つ墳の周縁を整美にした爲と覺しく、この丘塊の東側乃至北側の中腹には段狀に坦に切り開いた跡があり、同じく西側には幅約二十米程の無水澁を切り開いて以てこの丘塊をば區劃した跡がある。全長大約百米位、前方部横徑及後圓部直徑大約四十米位、墳高は東側段狀部を基底として八米内外、西側の無水澁底よりすれば尙ほ少しく高いであらう。海拔は三十七米内外と覺しい。後圓部の直ぐ接した東側には五平觀音の祠堂がある。墳上雑木林をなし、若干株の松もある。後圓部なる墳頂までは登つて展望し得るやう急坂の小徑があり、眺めが頗る佳い。

飯野坂觀音堂西副古墳。 直前古墳より無水湟を隔て、直ぐ西にある。その附近は松林になつて居る。方墳で、一邊が約二十米あり、墳高は五米内外ある。標高は三十七米九である。墳の周圍なる丘上を削つて封土としたらしく、その削つた跡と覺しい部分は北側に於て七八米の幅がある。

飯野坂觀音堂西北副古墳。 これの主古墳の後圓部の直ぐ後で西北側にある。低い所にあつて、大略かの無水湟底の續きにて併も幾分下つて來た水準を基底として居る。直徑十二米許、高さ三米程あり、現に方圓の中間形を示して居り、恐らくは推移形的方墳であつた事であらう。墳上に數株の老松が立つて居る。

(五) **中田村東部の古墳群。** 中田村袋原乃至以東にて名取川が汎濫の際に齎す土砂を以て幾分地表を高めたであらうやうな地域に於て少數個の小古墳が見られる。

袋原新田古墳。 部落内にて名取川堤防が急に屈曲して居るその屈曲角に接して直ぐ内側にある。本來は尙ほ少しく大形であつたであらうが、現存の直徑が七八米あり、墳高は堤防を抜く事三米弱であるから大略五米内外はあらう。墳上に人家の氏神らしいものがある。

四郎丸戸ノ内古墳。 部落に圍まれた田畑の田の中にある。現狀は卵圓形の輪廓を示し、その細れる端は東に向つて居る。直徑は東西七米、南北六米程あり、田の面よりの高さが二米許である。最高點は西側に偏在し、一株の松が立つて居る。山神及湯殿山の兩石塔と破損せる小板碑と瓦製祠とがある。

四郎丸尺丈島北古墳。 尺丈島北の部落の直ぐ南にて田の中にある。不規則橢圓形の輪廓で、直徑九米内外あり、田面上の高

さが二米半内外である。墳上に石祠があり十數株の老若の杉と一株の榎とが鬱蒼と生ひ茂つて居る。

(六) 仙臺市東郊南小泉の古墳群。特に雄大な古墳をも含んで居る。

南小泉一本杉伊達家邸内寶壽塚古墳。邸内の東北隅にある。現在は直徑十五・六米、墳高四米弱許の大きさに見えるが、以前には墳が尙ほ西に延びて居たと聞かされたから、大略西向の前方後圓墳であつた事であらう。その切り崩した斷面には石櫛の羨道が見えて居り、羨道の奥は矢張り石櫛用材としての巨大な板狀の石を以て玄室の入口を封鎖してある。墳の現存部の南斜面には一株の老杉があり、尙ほ墳上に寧ろ若い櫻が立つて居る。

南小泉遠見塚古墳。南小泉の主なる部落より少しく隔つた東方の田圃上に丘狀の巨體を横へて居る。前方後圓墳にして大略南面し、本來幅廣い一滄を周らしてあつたと認められ、滄に圍まれた墳域には墳丘のみならず參道までが存するのである。墳の全長約八十米、前方部の横徑約二十米、後圓部には一段あり、その直徑約四十米、その頂は平坦になつて居て、その平坦部の直徑約二十米、田面よりの前方部の高さ約三米、後圓部に於ける墳高約八米弱ある。參道は墳に直接してその西側に棚伏をなして存し、その長さは墳の全長に該當し、幅は部分により變化を見せて十乃至二十米位ある。この參道は恐らく祭場にも使用された事であらう。參道のみは滄に仕切られないで西北隅に於て外圍と直通したか、然らずんば少くとも一寸した橋を以て渡し得るやうになつて居た様である。滄の跡は現に田となつてあり、その幅は十五乃至三十米位あつた様である。墳及參道は現に畑となつてあり、又墳頂平坦部の殆ど中央に三角點があつ

て、標高十七米一である。澗を隔てた直ぐ西の畑地より埴輪破片を見たり古墳關係の遺物たるべき模造石劍の一小部分を得たりしたが、これ等は或はこの古墳のものであつたらうかも知れぬ。

(七) 仙臺市大窪谷地及門前の古墳群。根岸の里と呼ばれた附近とて遺跡があつて然るべきであり、多數の横穴の外尙ほ若干の尋常の古墳も存する。

門前兜塚古墳。圓墳にして、兜狀をなし、二段があり、本來一澗を周らしてあつたと認められる。墳丘は直徑四十米内外、高さ約八米ある。澗の幅は十五乃至二十米位であつたらしい。墳丘には大な礫よりの葺石があつた様である。墳丘の平坦部に二株の老松が立つて居る。

大窪谷地愛宕下切通上古墳。愛宕橋通りの切通の東南側の丘上にある。圓墳にして直徑約十米、高さ約二米ある。現に東南側と西北側とより切り崩されてある。西北側の断面を見るに巨礫をば間隔を措きつゝ排列してある。その排列してある區劃は直徑二米、高さ一米強あつたらしく、最も高い位置に置かれた巨礫は墳上の表面より下約一米の深さにある。この巨礫の全排列は恐らく石櫛に擬したものと認められる。原來石器時代遺跡であつた所に古墳が築かれたものと認められ、封土の上層及下層を通じて石器及土器が含まれてあり、土器より判ずるに大木式に屬するやうである。この丘上は栗林になつて居たもので、墳上にも栗樹がある。

大窪谷地大年寺下古墳。直前古墳のある丘の直ぐ下なる窪地に存する。現存形としての直徑十五米前後、高さは斜面上にある事とて東北側より見て最も高いやうになつてあり、大略三

米許ある。墳上に非軍銃射的臺が設けられてある。

(八) 茂ヶ崎村鹿野及金洗澤並に西多賀村裏町の古墳群。これは直前の古墳群と同系列に來べきもの乍ら呼稱上の便宜のために斯く呼び分ける事としたのである。最初に述べる二古墳は併せて學界によく知られて居る所である。

鹿野古墳。部落の西部より直ぐ南なる田の間に小さな丘狀をなし、現に畑となつてあれど尙ほ形が可なりよく保たれてある。前方後圓墳にして西に向ひ、全長約三十米、前方部横徑及後圓部直徑共に約十五米、田面上の前方部の高さ約二米半、同じく後圓部に於ける墳高約四米ある。但し本來はこれより少しく高かつたであらう事疑無い。墳頂に石棺の一部が露出して居るのである。石棺は刳拔式であり、その石材は凝灰岩と認められる。恐らく秋保村方面より齎したものであらう。

鹿野部落裏古墳。部落の大略中央部よりの畑續きで直ぐの南にあり、直前古墳よりは北寄りの東方約三百米の所にある。現在に於ては唯後圓部の輪櫓の一部を追跡し得るに過ぎぬ様になつて居る。東南を後としたものと認められる。後圓部の直徑が大約二十五米程あつた様である。

鹿野田圃古墳。直前古墳よりは南の方、鹿野古墳よりは東寄りの南の方にて、共に約六百米の距離にある。現在の形は方形で、一邊が十米程あり、墳より西に一枚の畑が續き、墳とこの畑とが併せて田に圍まれてあり、田の面よりの墳高約二米、畑の面よりのそれは約一米半である。標高は十六米二である。墳上に石祠があり、尙ほ各一株の杉及榎の老樹と三株の松とが立つて居る。

金洗澤古墳。笹谷街道より直ぐ北なれど尙ほ部落内と云つ

てよい部分にある。圓墳と認められ、一段あり、直徑約十二米、高さ約三米ある。墳上に松及櫻等が植ゑてあり、尙ほ一面に芝生になつて居る。

裏町三神峰丘上双古墳。 丘上の西部にあり、恰も女夫塚とも呼びたいやうに殆ど同じ位な二個の圓墳が雙んで存するのである。直徑は何れも約十二米、墳高は西なるが二米半許、東なるが二米許であれど、基底面の高低が相殺するから、實際の海拔は略々相等しい。標高は恐らく西なるを意味するらしく、六十七米二とある。東なる墳上には一基の記念碑がある。共に大略芝生になつて居る。

(九) **六郷村三本塚古墳。** 六郷村東部にも若干の小古墳があれど、茲には或る意味に於ける一定石のやうな位置にあるこの古墳だけを述べる事とする。三本塚部落の北端部に、舊い砂丘上にあり、現在海岸より約千八百米の距離にある。この砂丘は砂丘そのものとしては斷續的なれど、六郷村長屋敷・七郷村富岡・笹新田・高砂村南蒲生堀切等の線を連ねる砂丘の一大連鎖中の一員と認められる。又この古墳は東面した前方後圓墳であり、全長約十五米、後圓部直徑約八米、同じく墳高約一米半ある。前方部上に湯殿山の板碑がある。前方部より隣接小區域にかけて小さな小松林となつて居る。尙ほ墳上は程度の軽い芝生にもなつて居るのである。

(十) **結論。** 今試みに以上の古墳群乃至古墳をば綜括的に見やう。先づ著しい事には前方後圓墳の向に於て名取川以南と以北とで或る對照が見られるのである。以南に於ては見られた凡てが東乃至南、唯稀に南微西に向つて居るが、以北に於ては見られた五個の内の唯二個だけがさる方向を示し、他は西乃至

西北に向つて居る。併も後者中の後例は凡て地勢の高い方向つてさうなのである。これには正に意義があるであらう。先にも拙著にて概報した如く、佛教思想が既に加味されてある事と察せられ、然らんには云ふ迄もなく時代が降つて來て居る。更には以北に於ける著大な古墳の發達が以南に於けるよりも遅れて居る事を示すであらう。

尙ほ一つには下増田村杉ヶ袋及塚根の古墳群の著大な古墳¹までが圓墳であるに對し、館腰村飯野坂及植松丘上の古墳群の主班者は皆特に雄大な前方後圓墳であり且つ副古墳中にも圓墳以外の型までを見せて居る事である。或はこれを部民的差異と説明し得るか。海岸地帶でも又小さい古墳にも前方後圓墳があるのであるから、さる説明は成り立たぬであらう。恐らくこれには主として時代的差異があるものと思はれるのである。然らんには云ふ迄もなく著大な古墳までが圓墳である古墳群が餘計に舊かるべきである。個々の古墳に於て當たらぬからとて排斥する學者もあらうかなれど、これを古墳群として見た總體論とする時に、先哲蒲生君平翁の説は今尙ほ潑刺たるものあるを覺ゆるのである。

千貫村長岡丘上の古墳群も若干の傍證をも併せ考へて恐らくはこの對照としての舊い方に屬するらしく、尙ほともすれば下増田村のものに比してより舊からうともより新しくは無い程であるかも知れぬ。

岩沼町北部乃至附近に於ては館腰村堀内北向古墳は或はこの舊い方に屬するかも知れぬが、斷じての新舊は判じ難く、東平王塚古墳は古墳の最高潮期より以後のものであらう。

今も述べた館腰村飯野坂及植松丘上のものはこの平野區域

の限りに於て古墳の最高潮期のものを主として居やう事は殆ど自明と認められやう。唯問題は此處に於けるそれと中央に於けるそれとの間に如何程の偏差があらうかである。此處に於けるそれが遅れて居やう事を考へるは順當である。かの名取川以北の古墳に於て推定される佛教思想の混入から見ると、文化の傳播の速度は案外に遅くは無かつたものゝやうである。然る時にその遅れ方を甚だしく大きく見積らぬ方が眞に近いであらう。

扱同じ古墳群にて尙ほ問題がある。此處に於ける副古墳に方墳の見られる事である。この副古墳をば主古墳より引き離して時代がずつと降つたものと考へ得るか。著者は尙ほ次に述べやう理由によつてさうは考へない。方墳に就てはこれを凡て大化改新以後のものとする説と、これには新舊の兩種があつてその新しいものだけがさるものであるとする説とがある。傳統を重するやむごとなき雲の上のあたりは恐らく第一の説の通りであつたであらう。これを地方に及ぼして考へる時には寧ろ第二の説が當つて居るのではあるまいか。此處なる方墳にも埴輪圓筒が見えて居るものが明に存する。

一體圓墳でも前方後圓墳でも全く型が固定して居る譯では無く、一個一個にも個性の閃きが仄見えるやうに融通性に富んで居るものである。埴の有無及如何や段の有無及如何等は云はずもがな圓墳にも餘計に中高のもの及餘計に平坦なものなどがあり、又かの長岡丘上西古墳の如くに墳頂部が小さく括れて可成りに尖つたものなどがあり、前方後圓墳にも中高乃至平坦の差を見せたり、飯野坂觀音堂古墳の如くに前方部までが著しく高いものや、南小泉遠見塚古墳の如くに參道までが存するも

のなどがあるのである。この融通性から見る時に僅ばかり手数を省く事を意とせぬであらうやうな地方の豪族階級に於ては方墳の如きも圓墳より自ら脱化して起り得べき筈である。正圓形に周圍を削つて同じ形に封土を盛り上げるよりも四方から方形にさうする方が幾分樂であるべきであらう。斯う考へる時に方墳に埴輪の存するものある事にも重心を置き得べく又此處なる問題の古墳群に於てかの著しい發達振りを示すものをば方墳の故に甚だしく降つた時代にまで引き下げて考へずともよいであらう。但しこれは名取川以北のものにまでも論及して居るのでは無い事勿論である。

尙ほ同じくこの古墳群に於て植松丘上主古墳と藥師堂古墳との後にそれぞれ著しい副古墳が存するのは恐らく意味のある事であらう。觀音堂古墳に於ては著しい副古墳が後圓部より側方にあり、大略の後には却つてより小さい副古墳があるが、これは地勢上より餘儀なくされて大小の副古墳を斯く置き換へたものであらうかも知れぬ。主古墳及副古墳の相對的位置は恐らくは當時に於ける居館の制を摸して居る事であるべく神社に於ける拜殿及寢殿の制が矢張り同じ事を今日に傳へて居るであらう。主古墳の後圓部は恐らく主人公の晝間の居室乃至執務室に擬すべく、後なる著しい副古墳は後室に擬すべきであらう。この後室は嫡妻の宰配する所で兼ねて主人公の正則の寢室であつたであらう。妻妾が數人あつたらうとも嫡妻が特に重い位置を與へられてあつたらう事疑無い。但し古墳に於ては單に制を摸したと云ふに止り、主古墳に主人公後なる副古墳に嫡妻が葬られたと云ふ譯では勿論無いであらう。夫妻が同一古墳又更には同一石棺内に歟められたやうな事があつ

たらう筈である。

前方後圓墳の前方部は奥行を深めて以て墳の森嚴を増すためのものであるとする説には著者は賛成である。當時の居館に於て恐らく門までの前庭を長く取つて以て森嚴美を發揮せしめたものであるべく、その事は神社の制に於てもよく認められるのである。前方部の前縁は神社に於ける一の鳥居居館に於ける門の位置に該當して居る事であらう。前方後圓墳が他の部分は充分に曲線美を發揮して居るにも拘らず前縁が獨り直線的なるを本態とするのは斯く考へる事によつて理會し得るであらう。

名取川以北に見たやうな特別に時代の降つて居たらう若干のものは別とし山丘部乃至傾斜地に存する前方後圓墳が地勢の低い方に向つて居る事も矢張り恐らく居館の制を摸したものであるべく、又より舊かるべき多數の前方後圓墳が東乃至南に向つて居る事も同斷であらう。これ等も今日神社の制に於て肯き得る所である。

扱この平野區域に於ても海岸地帯に住居したたらう豪族と山丘部乃至平野に住居したたらうそれとがあつたであらう。前者は海岸傳ひに發展して來たらうものであるべく、この部民は餘計に進取的で夙く勢力を張つた事であらう。然も陸方への奥行が無いから主班君公には成り難かつたであらうと考へられる。下増田村杉ヶ袋及塚根乃至附近の古墳や六鄉村東部のそれなどは主としてさる豪族のものであつたであらう。但し當時の邊境の要津ともあるべき地域であるから海路下向した將卒などの葬られたものも無からうとは限るまい。

後者は主として農民を背景とした事であらう。さる部民は

進歩は遅かつたであらうが、廣大な地域が興へられてある事により着々確實な地歩を占め得た事と考へられる。古代に於ける主なる支配階級がさる種類の豪族であつたらう事は大略明な所である。多賀ノ君と呼ばれた方はこのやうな豪族であつたであらう。最も舊からう所は千貫村長岡古墳群、亞いでは館腰村飯野坂及植松丘上の古墳群、又一寸飛んで亞いでは仙臺市東郊南小泉、仙臺市大窪谷地及門前、茂ヶ崎村鹿野及金洗澤並に西多賀村裏町等の古墳群は多賀ノ君の直系乃至その縁故のものを主として居る事であらう。著者は尙ほ別稿にて述べた通り、館腰村附近より名取川以北に移る間に一寸した中繼所を踏んだものであらう事を考へて居る。

岩沼町北部及附近の古墳群に到つては館腰村堀内北向古墳の如きは地方豪族のものらしい節が多けれど、東平王塚古墳の如きは或は朝命を帶びて下向したであらうやうな方のものらしい可能性があるであらう。